

RAILWAY & CINEMA

「今夜、列車は走る」

渋谷アップリンク 初夏上映予定
下高井戸シネマ 8月2日(土)～8月8日(金)
京都シネマ 8月9日(土)～8月22日(金)
公式サイト <http://www.action-inc.co.jp/salida>



この映画は、アルゼンチンの新進気鋭の監督ニコラス・トゥオッツオの最初の長編劇映画作品で、二〇〇四年に製作されたものである。今まで紹介した鉄道映画とは異なり、この原稿を書いている四月末現在日本で公開中の真正銘の鉄道映画最新作である。

日本ではアルゼンチンの映画というと八〇年代後半の「タンゴ ガルデルの亡命」など、七〇年代後半の同国軍事独裁政権による弾圧を背景にした映画等が公開されているに過ぎない。そのわずかに公開されたアルゼンチンの映画は、筆者の観た限りでは、いずれも完成度がかなり高かったように記憶している。一方この映画は、前回紹介した「ナビゲーター」とほぼ同じテーマを取り上げているが、必ずしも完成度が高いとは言えない。しかし、魅力的な作品である。

九〇年代のアルゼンチンは、イギリス同様、国鉄が民営分割され、九万人の労働者が失業し、地方路線は廃線の憂き目にあう。そのような路線を抱えた大都市の鉄道労働者とその家族について物語が展開する。廃線によ

鉄道と映画 — 21

南米アルゼンチンの
誇り高い鉄道員とその家族の物語。

Próxima Salida

「今夜、列車は走る」



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション (FC) への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

り生きる希望を無くし自殺した鉄道員の息子は、父の遺書を読みながら、友人たちと再起のあり方を模索する。一方失業した鉄道員たちは、誇りにしていた仕事を失うのみならず、家族ともども生活の維持に苦闘する。とうとう一部は、自暴自棄になり、近くのスーパーに強盗として押し入る。彼らは、当然警察に包囲される。そのとき、若者たちが動き出す。

鉄道員たちの失業による悲しさは、ケン・ローチを思わせるリアルさで丁寧な描かれており、この新進気鋭の監督の力量が相当なものであることがわかる。また、未来の世代への希望の表明のため、結末に明るさを持たせるという監督の意図も十分理解できる。しかし、問題は、その肝心のラストが観客に少し甘いと感じてしまうところにある。その理由は、失業した鉄道員たちの悲惨さという背景は、見事に描かれているが、若者が行動に移すに至る過程が十分描けていないからであると思う。邦題からも類推されるとおり、映画のラストでは鉄道員の息子たちが立ち上がり、列車を再び走らせるのであるが、その行動に至るまでの彼等の心の葛藤や周囲との軋轢が十分描ききれていないのである。そのため、本来より感動的であるべき、ラストが平板で甘くなってしまうのが惜まれる。

映画に出てくる列車は、かなり古いモデルのディーゼル機関車であり、修理工場は、これも手工業型のものであるなど、これまで紹介してきた欧米の鉄道とはかなり趣を異にするため、この鉄道なら廃線も止むを得ないかと思えるほどである。しかし、見方を変えれば、人間臭い鉄道であり、切り捨てられたとき痛みが残るような鉄道であるとも言える。筆者は、二十数年前日本の国鉄民営化の折、地方不採算線の廃止のため地方を回ったことがあり、その時は需要がない路線を維持しろというのは余りに理不尽と考えていたが、鉄道員や地方の利用者にとっては、地方鉄道路線は理屈を超えた愛着を覚える存在なのかもしれない。欠点はあるが「今夜、列車は走る」は、見る価値のある映画である。